鶏卵

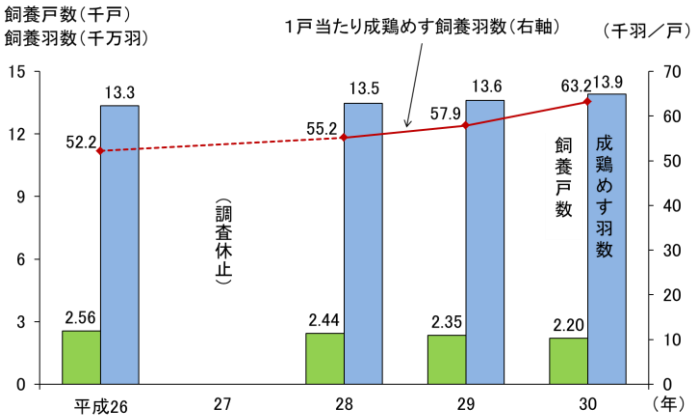
◆飼養動向

30年２月現在の採卵鶏飼養羽数、３.２％増加

採卵鶏の飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に前年より150戸減少し、平成30年は2200戸（前年比６.４％減）となった。一方、飼養羽数は集約による大規模化により１億8195万羽（同３.２％増）となった。このうち、実際に産卵を行う成鶏めすの飼養羽数は、１億3904万羽（同２.２％増）とわずかに増加した。成鶏めすの飼養戸数および飼養羽数を飼養規模別に見ると、飼養戸数は全ての階層で減少した一方で、飼養羽数は飼養規模の大きい階層で増加した。

この結果、１戸当たりの平均成鶏めす飼養羽数は前年から5300羽増の６万3200羽（同９.２％増）となり、大規模化が進んでいる（図１）。

図１　採卵鶏の飼養戸数および成鶏めす羽数



資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」
注１：各年２月１日現在。なお、30年は概算値
２：成鶏めすとは、種鶏を除く６カ月齢以上のめすをいう。
３：飼養戸数は、種鶏およびひな（６カ月齢未満）のみの飼養者および成鶏めす羽数１千羽未満の飼養者を除く。
４：平成 27 年は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

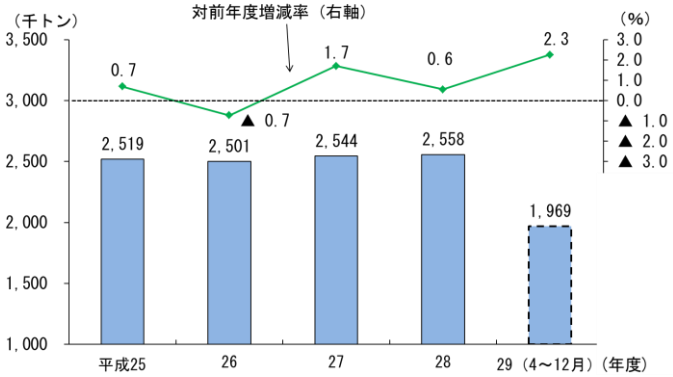
◆生　産

29年度(４月～12月)の生産量、２.３％増加

鶏卵生産量は、近年、250万トン台で推移しており、安定して推移している。

平成27年度は、254万3640トン（前年度比１.７％増）と前年度をわずかに上回ったものの、28年度、29年度（４～12月）は、近年の好調な鶏卵相場を受け、生産者の増産意欲が高まっており、それぞれ255万7680トン（同０.６％増）、196万9184トン（前年同期比２.３％増）といずれも前年度を上回って推移している（図２）。

図２　鶏卵の生産



資料：農林水産省「鶏卵流通統計」
注：平成 30 年１月以降のデータは未公表。

◆輸　入

29年度の輸入量、20.3％増加

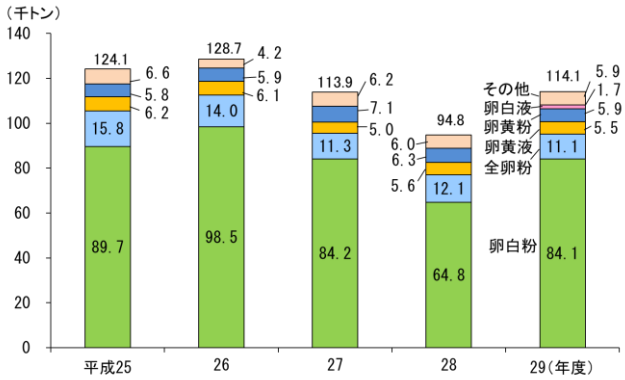
鶏卵の輸入量（殻付き換算ベース）は、国内需要量の４％程度を占めており、ほとんどが業務・加工用向けとなる。輸入量の約９割が保存性に優れ、輸送コストの安い粉卵であり、そのうち大半を占める卵白粉については、ハム・ソーセージのつなぎ原料や即席乾燥麺などに使われている。

平成27年度は、主要輸入先国である米国での高病原性鳥インフルエンザの発生などもあり、11万3866トン（前年度比11.5％減）とかなり大きく減少した。

28年度は、米国産の輸入量が回復傾向にあったものの、卵白粉の国際価格が上昇したことから、９万4833トン（同16.7％減）と10万トンを割り込んだ。

29年度は､卵白粉の国際価格が落ち着いたことから、11万4084トン（同20.3％増）と大幅に増加した（図３）。

図３　鶏卵の輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：殻付き換算ベース。

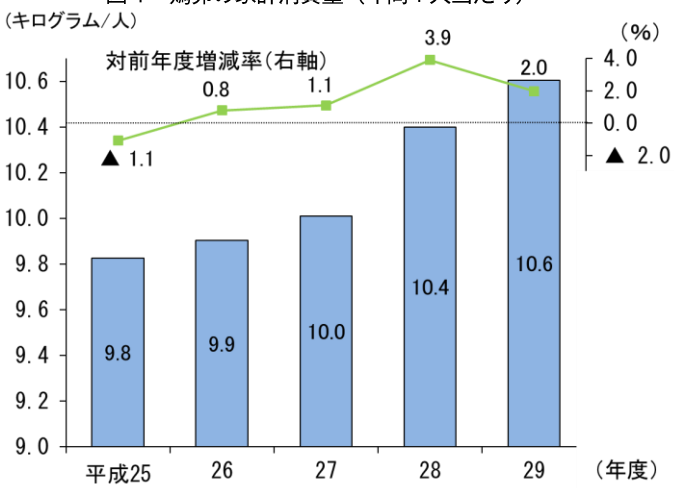
◆消　費

29年度の１人当たり家計消費量、２.０％増加

家計消費量は、近年増加傾向で推移している。

平成27年度以降は、テーブルエッグや、コンビニエンスストアなどで販売されている卵加工品の需要増を受け、比較的好調に推移しており、27年度は年間１人当たり10.01キログラム（前年度比１.１％増）、28年度は同10.40キログラム（同３.９％増）となり、29年度は同10.60キログラム（同２.０％増）と３年連続で10キログラムを上回った（図４）。

図４　鶏卵の家計消費量（年間１人当たり）



資料：総務省「家計調査報告」

◆卸売価格

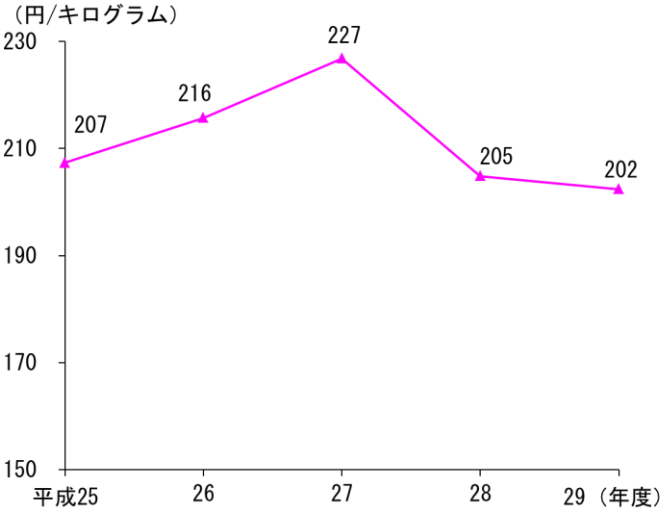
29年度の卸売価格、５年連続で200円台を記録

鶏卵卸売価格（東京全農系M玉）は、夏場の不需要期に向けて低下し、年末の需要期に向けて上昇する傾向がある。

平成27年度は、鶏卵を使用したデザートやマヨネーズなどの加工向けを含めた旺盛な需要を背景に、１キログラム当たり227円（前年度比５.１％高）と前年度をやや上回り、28年度は、引き続き需要が好調だったものの生産量の増加により需給が緩んだことから、同205円（同９.７％安）となった。

29年度も同202円（同１.３％安）と前年度を下回ったものの、５年連続で200円台を記録した（図５）。

図５　鶏卵の卸売価格（東京全農系M玉）



資料：JA 全農たまご株式会社「月別鶏卵相場」
注：消費税を含まない。